

陸象山はなぜ主役になれなかったか

吉田公平

一、はじめに

陸象山（一一三九—一九二）は、南宋時代の新儒教徒の一人である。この人はいったいどのようなように認知されてきたのであろうか。

中国哲学史上、最高の哲学者として、別格の評価を受ける、同じく南宋時代の朱子（一一三〇—一二〇〇）の、最大の論争相手であった陸象山。あるいは、後の明代に国家公認の教学体系であった朱子学に逆らって、所謂陽明学を樹立した王陽明（一一七一—二五七）の、先駆者としての陸象山。陸象山に対する平均的な評価は右の二点を基軸とすると、言っても、大きく過つことはない。

たしかに、陸象山は、朱子の論敵として、あるいは王陽明の先駆者として、それ相当地高く評価されてつねに話題にされてきた。しかし、陸象山はいつも脇役を演じさせられてきた、いわば引き立て役とでもいうべき位置に甘んじてきたとも言える。芸達者な引き立て役が脇役陣を固めてこそ、主役は存分に力量を発揮して、その存在感を鮮明に訴えることが

出来る。それでこそ、その舞台は大成功に終わるのであるから、脇役に不足があるはずがない。朱子にせよ王陽明にせよ、まごうかたなく、中国思想史上の一流どころの大役者であったから、彼らの敵役・先駆けを歴史上の大舞台で十二分にこなした陸象山もまた、一流の役者であったことは、いかにも疑問の余地はない。

それでは、陸象山が十分に大舞台で主役を演ずることができなかったのは何故か。いいかえるならば、脇役に甘んずるしかなかった、その演技力不足とは何であったのか。

まず、考えられるのは、思想家としての陸象山は、最初から朱子に対する批判者として出発した、いわば、朱子あっての陸象山であって、決してその逆ではなかったということである。既存の思惟体系の中核部分を批判するという形で思索者として独立宣言するのが、思想家の常態であるから、陸象山が先輩の朱子を批判するという形で思索者として出発したことは、異とするに足らない。同時代の陸象山に異議申し立てを促すだけの衝撃力をその当時朱子学が既に持ち合わせていたことをまず確認した上で、問題はその批判の視角と深度の如何にある。批判者の誰もが独立しえた訳ではないからである。

二、朱・陸の交流

朱子と陸象山が始めて会見したのは、陸象山が三十六歳・朱子が四十五歳の時であった。その時、朱子は既に自らの基本的立場を確立しえており、哲学者としての名声はようやく著聞になるころであった。陸象山は朱子の哲学体系の中核をなす性善説理解がもつ弱点を鋭く指摘して批判した。

朱子の盟友であった呂東萊は、壮大な規模の哲学体系を構築しつつあった朱子の強靱な思索力を高く評価する。と同時

に、この朱子に対して、その根本原理（性善説）を共有しながらも、否、共有すればこそ、果敢に挑戦する陸象山の明晰な頭脳をもこよなく珍重した。この両巨人が相知る事のないことを「斯道」のために惜しんだ呂東萊が、両者の会見を企画したのである。所謂鵝湖の会である。

両者はともに性善説を人間の本性論として認める。しかし、本来は性善であっても多様な現実態をいかに理解し、その現実態に本来性をどう実現するのかという、現実態認識と実践倫理をめぐって、両者は激しく衝突した。

朱子はいくまでも漸進的に段階を踏んで本来の自己を実現することを主張する。本来は完全であっても、現実はその本来性を發揮し実現するとなると、そこには力量にも個人差があり、実現過程も千差万別であること、いいかえるならば、実現を阻む要因や、その強さの程度も多種多様であること。つまりは背理態を結果する可能性が大きいことを強く考慮したのである。その結果、朱子は心外（実践主体の外）に実践者を教導する「定理」を措定して、心（実践主体）はそれに遵うことを要諦とした。この「定理」の完全な体现者を聖人とみため、孔子を歴史上の模範と規定し、この孔子の言行を学習（読書窮理）して、それを参考にして、その導きのもとに自己の本来性を実現するようにと、強く主張したのである。

陸象山は、心外の定理に依存する実践論は半ば他力に依存する実践論であり、それは性善説に立脚する真の実践論ではない、と語気鋭く非難する。陸象山は、本来的に万人が倫理的に完全な本性を先天的に賦与されているのであるから、はじめから、自らの完全性を熱源にしてその本性を自力で実現すべきであり、またそれは原理的に可能であると、力説した。つまりは、陸象山は、自らは性善説の清教徒であると自認して、朱子の性善説理解を不純なもの、完き自力主義ではない、と難詰したのである。

朱子の依って立つ性善説を是認した上での内在的批判であっただけに、陸象山の朱子批判は、性善説そのものの理解と

しては、的を得た立論であった。朱子は鵝湖の会ではたじたじであった。陸象山の性善説論はまことに論旨明晰であった。しかし、善なる本性を現実態に実現することが困難であることもまた事実である。朱子もまた容易には屈服しない。

両者は南康で二回目の会見をした。そのおり、自説を再検討しようとしないう朱子を陸象山は「意見の人」と決めつけた。朱子は「邪な意見」は捨て去るべきだが、「正しい意見」はなくてはならない、と陸象山の決めつけを軽くいなしている。

三回目の交渉は書信の応酬による。両者共におのれの主張を自信満々に開陳しており、両者の思考方法の特色が鮮明に出しており、その意味では興味深い論争ではあるが、論争そのものは水掛け論に終わっている。

各々、門人の前では、折に触れてお互いに論敵の人物力量を高く評価する発言をしてはいるものの、ことが学説そのものに及ぶと、相手を酷評してやまなかった。

朱子の目からみれば、陸象山の主張そのものは異端以外のなにものでもない。しかもこの異端は異教ではなくして、あくまでも儒教陣営内部の異端であり、もし論破しきることができたならば最強の同行者になると期待してもよい、それほどの道器であった。朱子の陸象山評価に二面性があり、抑揚に富むのは、右の事情による。

三、陸子学の不成立

本性論をめぐる朱子と陸象山が互角に論争しながら、のちの新儒教の歴史に於いて所謂朱子学或いは朱子学派が大きな役割を果たしたのに対して、陸子学或いは陸子学派が形成されることなく、その意味では陸象山が朱子に対して勝者になりえなかったのは、何故だろうか。

五十四歳で陸象山が死去した時、朱子は六十三歳であった。朱子はこののち八年間にわたって思索する生活を続け、七

十一歳で死去した。朱子は六十歳で晩年定論を完成させた。その後の十年間は、偽学の禁が降りかかり、家庭に不幸が続き、朱子自身も健康を損なうなど、負の要因をいくた抱えながらも、哲学的には新生面を開拓することはないものの、多くの門生を得て、所謂朱子学を熟成させた十年間であった。

それに対して、陸象山心学は少数の同調者を得ながらも、陸象山が死去して主唱者を失うと、朱門に赴く者もあり、教線は急速に縮小してしまう。朱門は朱子晩年の十年に著しく増加したのに対して、陸門は強力な後継者群に恵まれることなく、陸象山が死去してしまうと、急速に求心力を失っていった。学派として理論的に一層の充実と整備をはかり、教線を拡大強化するという事にかけては、その熱量と成果が小さかったのである。このことの現実的な意味は小さくない。

もう一つには、広範な分野に亘る、膨大な著書・編著を残した朱子に比べると、著述注解そのものに重要な意義を認めないかった陸象山は、まとまった著作は何一つ残さなかった。著書が情報の普及伝達・会得吸収に大きな役割を果たしていた時代における、両者のこの著しい相違を、忘れてはいけない。

以上は、実は状況を説明したにすぎない。やはり、何ととっても、陸象山の思想体系の規模が朱子のそれに比較して、はるかに及ばなかったことが主因であろう。陸象山の本領が尤も発揮された、本性論をめぐる論議においてこそ、陸象山は互角にわたりあったものの、それ以外の分野に関しては、陸象山は朱子に対抗しうるほどのものを生み出してはいない。その本領を發揮した性善説をめぐる論議に於ける陸象山の舌鋒の鋭さは、本来性善という原理を純粹に展開せんとする、人間理解の原理的純粹さと明晰簡易な実践論に起因する。純粹さと簡易さとは原理主義の強みではあるが、これが実は人間把握の単調さと背中あわせの立論であった。その点「本来性―現実性」を二枚腰で思索追求した朱子の立論の方が、実態に対してはるかに適用妥当性に富むものといえる。陸象山からは不純な性善説把握であると非難された朱子ではあった

が、それは現実態の多様性を反映したものであり、原理主義者には不純にみえた、そのことのゆえにむしろ、現実態により適合した人間理解と実践論であった。総合力を判定するなら、陸象山に勝ち目はない。とはいえ、新儒教の原理の中核を構成する性善説について、陸象山が原理主義に立脚した内在的批判を展開したが故に、陸象山が敗者になることもありえない。だからこそ、朱子学が學術思想界に於いて生命を持ち続ける限り、その原理を再確認再検討しようとする際には、陸象山の原理主義に立脚した朱子批判がつねに彼らの意識に浮上する。陸象山は朱子の「忠友」であった。その意味でこそ陸象山は朱子の好敵手であった。朱陸以後の新儒教の世界で、朱陸の是非をめぐる論議が絶えることなく展開された所以である。所謂朱陸論争である。

四、王陽明の陸象山論

さて、明代になると、朱子学は科挙の規準教学として公許された。朱子学は先験的に正しいという大前提のもとに、若い受験生はみな必ず朱子学を学習することになった。このことは清朝一代を通じても基本的には変わらない。朱子が準備した思考様式が明清二朝の士大夫知識人が思想を形成する際に静かに着実に浸透し、強く拘束することになる。個々のある学説がある個人に、或いはある学派に影響を与えたということよりも、この思考様式という形で与えられた影響の方が、むしろ深刻甚大であったことをとくに銘記しておきたい。

王陽明が登場して、朱子学一尊の体制に風穴をあけるまでの、所謂明代前半期の思想界が、全体として低調なのは、競争者を排除してしまったことも、その一因であろう。

王陽明が思相形成した時代は、まさしく強制的に閉塞させられていた時代であった。徐々に朱子学に疑問を覚える者が

登場するが、それらの先河をうけて、一気に朱子学の枠を突き崩したのが、王陽明であった。王陽明が朱子学から解放されて独立するまでの思想形成期を『王陽明年譜』は五溺の時代という。朱子学の呪縛から自力で抜け出すことがいかに容易ではなかったかを象徴的に物語るといえよう。とはいえ、王陽明もまた朱子が準備した基本的な思考の枠組みから自由になったわけではない。

朱子学の権威が絶対的であった状況の中では、陸象山がとくに着目されることはなかった。大勢としては、陸子学ははなから誤まれる思惟（異端）であることは自明なこととして了解されていた。朱陸調和論者もいるにはいたが、それは多くの少数派であった。その調和論とて、朱子学の正しさを証明するための補強論であった。陸象山の本貫である江西省臨川を中心に陸象山擁護論が湧出することもあるが、その熱量が飛躍的に増大することもなかった。朱子及び朱子学派の著作が、科挙がらみで、おびただしく編刊されたのに比較すると、陸学関係の著作の編刊はまことに寥々たるものでしかなかった。時勢が然らしめたのである。

ところが、王陽明の提唱した良知心学が思想界を風靡して、所謂王学（姚江学・陽明学）が一大潮流となると、状況は一変する。良知心学の担い手たちや、その影響下にあった人々の中で、陸象山を再評価しようとする動きが顕著になる。陸象山顕彰運動の一つとして『陸象山全集』が刊行されたりもした。しかし、何と云っても、陸象山心学を再評価する契機となったのは、『陸象山全集』の刊行に先だって編刊された、王陽明の『朱子晚年定論』である。ここでは、用意周到にも陸象山を舞台から引っ込めて、朱子に独り舞台を演じさせた。朱陸早異晩同論を提唱した程敏政の『道一編』を承けて、朱子は晩年に自説を全面的に自己批判して、実は陸象山心学と同調したのであり、その基調こそが王陽明心学として発展したのだというのが、王陽明が『朱子晚年定論』にこめた主張であった。ここに、「陸象山―『朱子』―王陽明」という

心学路線の上に陸象山は全面的に復権されたのである。王陽明は『陸象山全集』の序文を執筆しており、「聖人の学は、心学なり」と説破した。後に陸子学と王学が一括されて陸王学と呼称されたのはまことに理由のあることである。王陽明が晩年の朱子を強引に心学路線にひきづりこんだ『朱子晩年定論』が、朱子学陣営から総攻撃を受けることになるのは、いかにもやむを得ない。

ただし、あらためてくり返すまでもない事ながら、念のために述べておきたいことがある。それは、陸子学を顕彰した人々が、陸子学に導かれて朱子学を批判する視点を獲得したわけではない、ということである。彼らは朱子学を体験する中で、独自に性善説の原理をあらためて探求することを余儀なくさせられたのである。その後には自らの先駆者として陸象山を見いだして顕彰したのである。

王陽明の朱陸論である『朱子晩年定論』において、王陽明は、朱子の独り舞台として行論したのは、旧来の朱陸論レベルで理解されることを忌避したからともいえるが、王陽明自身が朱子学体験の中から、その思想体系の核心である性善説の真面目を発見したという個人的体験に促された結果でもある。

ともあれ、王陽明は、陸象山を高く評価しながらも、良知心学を発見する過程に於いて、陸象山に恩恵を受けたと言も公言していない。むしろ、朱子晩年の心学を継承する者という含みを持たせた発言をしている王陽明の朱陸論、とりわけ陸象山論は、これもまたまことに抑揚に富んだ表現となっている。

朱子在世時の最大のライバルであった陸象山を、王陽明は、自らの先駆者として尤も高く評価している。しかし、陸象山はあくまでも先駆者であって、それ以上でもそれ以下でもない。思想界のなかでは、尤も好意的であった王陽明派下に於いてすら、陸象山の本領が掛け値無しに理解されることもまた少なかった。

五、陸象山の位置

それではなぜ、陸象山は先駆者の地位に甘んずることになったのか。いいかえるならば、「陸王学」の呼称を許さずに、王陽明派下の思想運動をも含めてそれを「陸子学」と呼称させるほどの、思想としての強さを持ち得なかった、その構造的弱さとはいったい何なのか。

陸象山の著書・言表のなかでは、直に朱子の所説を批判したものが、尤も精彩に富んでいる。陸象山の真面目がさながらに発揮されているからであろう。その陸象山が自らの性善説を述べる段になると、彼自身は自信に満ちて堂々と立論してはいるものの、その心性論の構造は、案外に単調なのである。複雑深淵であることがそのまま強さを持つことになるわけではない。むしろ、この単純さが明晰さを生み、受容を容易にする強さを持つ。性善説の原理を直截に表現し、単純明快に理念型を提示するから、理解されやすいという利点を持つ。しかし、この単純明快さは同時に複雑多様な現実態に十分に対応しきれないという弱さをもつ。原理として正しいと確信する場合、えてして激越な他者批判を展開しがちである。それは、議論としては立論可能ではあっても、その過高の論は、議論に酔う賛同者を得たとしても、万人が日常生活の場で具体的に実践するその原論として妥当性を獲得することは、むしろ難しい。

陸象山の言表を読んでいて強い印象をうけることが二つある。一つは、後に王陽明が朱子学を批判するとき用いた鍵言葉を、既に陸象山が使用していることである。例えば、心即理、持敬蛇足説、六経註脚論、學術を以て天下を殺すなど（王陽明はこれらの言表が陸象山のそれを祖述した表現であると公言していないところが意味深長なのであるが）。もう一つは、既に使用しているのに、その言葉がもつ、朱子学に対する破壊力の大きさについて、陸象山自身が気がついていなかった節が

みられることである。陸象山は朱子学批判の中で使用するにとどまって、思惟体系を象徴的に表現する鍵言葉に昇華させ、その鍵言葉を中核にすえて思惟構造の緊密化をはかり、思想としての熱量を増すという試みをしきれていない。

同じく朱子学を批判した王陽明とはこの点では著しく異なっている。王陽明は朱子の持敬説に対しては持敬蛇足説を、性即理説に対しては心即理説を、經書重視に対しては六經註脚説・五經皆史論を、知先行後論に対しては知行合一説を、性善説に対しては無善無惡説を、という具合に、朱子学体系に対する反措定の鍵言葉を明確に自覚して提出しており、これらの鍵言葉を中核にすえて、良心学体系自体を周到に吟味している。心即理とか、六經註脚論などは、陸象山心学を示す鍵言葉として理解されがちであるが、それは、陽明学の世界で鍵言葉の地位を獲得した後に、先駆者である陸象山に遡って、そのように言われているに過ぎない。陸象山自身がそれらを自らの思想体系を表す鍵言葉であると明確に自覚し、慎重に吟味したうえで使用しているわけではない。

そのうえ、陸象山の「意見」論や、「善惡」論などは、もう一步思索を深めれば、無善無惡説にまで発展する可能性があり、また、心即理説を實踐論に即して立論すれば、知行合一説になるはずである、などと、後に王陽明の開示を待つ諸説は、その萌芽的表現はすでに陸象山に見え、論理的には王陽明の所論にまで展開する可能性は内包されているのに、陸象山は、そこにまで思い至らなかった。

陸象山は、整備されつつあった朱子学を聞き知って、同時代人として批判した。王陽明は、制度化された朱子学を強制されて挫折し、その果てに朱子学を批判した。ともに朱子学を批判することを契機にして思想家として独立しながらも、両者の朱子学体験の質的差異が、思惟体系の密度の差異を生んだのだとも言えよう。

朱子は、新たに『四書』の世界を提示し、北宋の道学者の言説を総検討する中で、概念装置を豊富に駆使して、規模広

大にして、構造緻密な思惟体系を打ち建てた。いわば重戦車編隊の行軍を完遂した。

陸象山は、『孟子』の性善説を顕彰した。それは陸象山自身が告白するように、『孟子』に直参した所得であった。さればこそ、既存の『孟子』解釈をことさらに総批判するために『孟子』真解を著す必要はなかった。陸象山は『春秋』伝を執筆する心算であったが、それは実現しなかった。おしなべて、著書・注解・編刊という形で思索の成果を後世に残すということはなされなかった。陸象山は朱子学を批判するための著書をさえ一つも執筆していない。陸象山心学には著作・注解・編刊を積極的に促す契機がそもそも希薄であったのである。

まことに陸象山は王陽明の先駆者であった。王陽明の先駆者を宋学に求めれば、それはまごうことなく陸象山である。後世、陸王学と併称されるけれども、それはあくまでも王陽明が登場した事による結果にすぎない。王陽明が、朱陸論争が伏在する新儒教の歴史の中で、朱子学を批判する形で思想家として独立することができたのであるから、結果的に陸象山が先駆者の位置を占めるのは、いかにも自然なことである。このことから朱陸論争が士大夫読書人の思考様式を強く規制していたことがうかがい知れよう。

良知心学が宣言されると、朱子学と陽明学との論争もまた朱陸論争の延長線上で敢行された。この場合の「陸子学」の実質的内容は陽明学であった。

朱子学が活学されるところ、陸子学は反面教師として話題にされ、陽明学が流行するにつれて、朱陸論争はいやましに喧しくなる。朱子学派・陸王学派いりみだれて、我が陣営の命運をかけて、さまざまな朱陸論が開陳され、陸象山は一方の当事者として檜舞台に登場させられた。しかし、この朱陸論争そのものは陸象山の人と思想を理解するのにさしたる貢献をしていない。陸象山理解を深化させる成果を生まなかったのである。

その原因は、みずからが正しいと確信する朱子学者は敵役として、陽明学者は援軍として、陸象山を舞台に引きだして脇役を演じさせたのにすぎないからである。後世の朱陸論争の場では、ついに主役を演ずることの無かった陸象山は、それ自体としてその本領が探求されることはなかった。

六、日本における陸象山

日本に陸象山が最初に紹介されたのがいつなのかはつまびらかにしない。ただし、陸象山が本格的に論議されたのは、江戸時代の初期、藤原惺窩と林羅山の師弟問答において展開された、所謂朱陸論争がその嚆矢ではなからうか。

日本に先んじて、朱子学を本格的に受容した朝鮮朝においては、朱子学一尊の気風がことのほか濃厚であった。そのために朱子学に異議をとねた陸象山の思想が、朱子学とは別に、独自の価値があると認められて商量されるということではなかった。陸象山心学ははなから誤れる思想体系であるという認識が先に定着してしまったのである。また、陽明学が公然と布教される余地がなかった朝鮮朝においては、朱子学は敵対する有力な学派を持たないままに、朱子学内部での論争に明け暮れたために、せっかく中国から朱陸論争の所産が紹介されても、朱陸論争という形で議論が白熱化することもなかった。勢い、陸象山心学が脚光を浴びるということもなかった。陸王心学を公然と提唱する新儒教徒が登場しなかったのが、朝鮮朝の儒学の一大特色である。

明代後半期所産の激越な反陽明学の朱子学護教書である『学部通弁』などが、朱子学一尊体制下の朝鮮で刊行され、それが十七世紀の初頭に日本に輸入されて、その中で陸象山の思想が初めて紹介されたのではなかったか。いいかえるならば、朱子学陣営が刊行した朱陸論争書が、中国の新儒教を初めて組織立てて紹介したために、陸王学は誤謬の思想体系で

あるという理解が先行した。林羅山がその代表である。しかし、まもなく中江藤樹とその門流が登場すると状況は一変する。十七世紀後期は第一次の陽明学ブームであった。王陽明の主要な著作は和刻された。それに随伴して陸象山の語録も『四名公話録』の中で和刻された。時を同じくして輸入された反陽明学の書も和刻された。さらに中国大陸から大量の書籍が直輸入されるようになり、学術情報が豊かになるにつれ、視野が広くなり、水準も高くなる。中国の学界動向に明るくなるにつれて、新儒教の論争主題が朱陸論争であることを知るようになる。日本の儒学徒が朱陸論争に積極的に参加するようになる。そのような時代思潮の中で中江藤樹などの、陽明学を好意的に評価する思想家が誕生したのである。

少数ながらも陽明学の理解者のなかに、陸象山に着目したものがいても、それがそのまま、陸象山の理解者を生むことにならなかったのは何故か。その答えは簡単である。『陸象山全集』の入手が困難であったために、朱子学者の逆宣伝をおしよけて、陸象山の本領をじかに確かめる術がなかったからである。この点が王陽明と陸象山との理解のされかたに違いが生まれた原因の一つである。そもそも輸出元の中国に於いて、王陽明の著作が容易に読むことが出来たのに対して、陸象山の著作は王陽明ほどには頻繁には刊行されず、入手がそう容易ではなかった。それがそのまま日本の読書界に反映したわけであるが、情報量の不足が陸象山に対する独自の関心を生まなかったと一応は言える。しかし、より根本的な原因は陸象山の位置にある。

朱子学者が紹介する朱陸論の中では、陸象山は専ら悪役である。陽明学者が紹介する朱陸論では朱子の真の論敵は王陽明である。そのうえ陽明学の遺産を活用した、王陽明以後の朱陸論は、すでに綿密な論理構造を下敷きにしており、ここでは陸象山は文字通り歴史上の先駆者にすぎない。陸象山を王陽明の先駆者と認知したからといっても、それまでのことであって、陸象山の所説を特別に考察するものは稀であった。それを象徴的に示すのが、中江藤樹とその門流であろう。

藤樹門流に於いては王陽明・王龍溪の兩人は滋養源として活学されるものの、陸象山にまで遡及して考察されることはなかった。もちろん、このおりも『陸象山全集』が入手できなかったことが物理的な要因では有ったろう。しかし、この困難を克服して陸象山に直参したいという渴望を抱かせるだけの衝迫力を、朱陸論争の中の陸象山は持ち合わせてはいなかった。ましてや、朱陸の争いを越えて孔子・孟子の「古学」を求めた古学派・古文辞学派の儒学徒が、陸象山に積極的に関心を示すことはなかった。

七、陸象山の真面目

以上、中国・朝鮮・日本の儒学史上においては、陸象山は主に朱陸論争史の中で受容されてきたことを概観してきたが、このように記述してしまうと、陸象山の思想がいかに魅力に乏しいものである、という印象を与えたかもしれない。

しかし、それは、朱陸論争史の中に矮小化された陸象山が、そのような役回りを演じさせられたままであって、元来の陸象山の思想が二流のものであったことを意味しない。

王陽明が陸象山を評価した際に「粗」（あらくれずり）であると責備の非難をしながらも、総合的には最高の評価をしてきたことが象徴するように、陸象山の思想は、その思想表現の稚拙さを伴いながらも、新儒教の徴表の一つである性善説の本質を白日のもとに明らかにしており、そこに立脚して朱子の性善説理解の急所を衝いて鋭利な批判を展開した。そこには性善説の原理主義者としての真面目が遺憾なく発揮されている。中国思想史において後の思想家に深刻な影響を及ぼした、白熱した論争が展開されたことが何度か有る。そのなかでも朱陸論争はまごうかたなく最高度の論争の一つである。その一方の当事者であった陸象山の原思想が魅力に乏しいはずがない。

いったいに、朱陸在世時にすでに両門の間で、朱子学を「道門学」・陸子学を「尊徳性」などと、浅はかにも二項対立の中に押し込んで理解する向きがあった。論争が激化すると原姿は忘れられてしまうものなのかも知れない。特に後世、陸王が一括されるようになるとおのこと、固定化された枠組みの中に矮小化される傾向に拍車がかけられた。それでも、朱子・王陽明の場合は、熱烈な信奉者によって原姿追求の努力がなされた。陸象山については、一人清初の李穆堂が試みたが、朱陸論争が尤も激しかった時勢の中でのことであつたからか、李穆堂の朱陸論は平衡感覚を欠落したものに終わつており、陸象山の本領を明らかにすることには、必ずしも成功していない。

そのような後世の朱陸論争の枠組みから自由になつて、陸象山の肉声に素直に耳を傾けてみると、そこに開陳されている「自力による自己実現」論にしても、朱子学批判にしても、誠にみずみずしい。

王陽明の朱子学批判は誠に的確であり、その表現も陸象山よりはずっと洗練されている。しかし、王陽明が批判した朱子学は、国教として制度化されて定型化した「朱子後学」としての朱子学であつた。

陸象山が批判した朱子学は、同時代に生きた朱子その人の「原朱子学」、それも整備されつつあつた成長過程の朱子学であつた。陸象山の朱子学に対する批判は、新儒教の骨髄が集大成されつつあつた時の朱子学についての批判であるだけに、陸象山の証言は貴重である。

党派心に促された後世の朱陸論は、陸象山の本領を見失つてしまつた。王陽明に比較するとき、陸象山の思想はいかにも未完成であるという印象はぬぐえない。また、同時代者の朱子と並べてみると、規模の上では確かに見劣りするものの、こと性善説理解を中核とする心性論・実践論の面では、質的には互角であり、これはこれで完結した体系であつた。

(本稿はもと藤樹研究一四七号に掲載した「朱・王における陸子の位置」を加筆・訂正したものである。)(広島大学文学部教授)